

アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察

—七つの聖句が描く三位一体論—

九里 秀一郎*

要約

本研究では、アウグスティヌスの三位一体論をテキストに用いて、キリスト教と社会福祉の接点について考察している。本論はその一環として、テキストで引用している新約聖書の言葉に注目して、聖書と三位一体論の関係を検討した。三位一体論では、新約聖書の良く知られている七つの聖句が多く引用されている。この七つの聖句が引用されている部分のテキストの内容を集約したところ、アウグスティヌス独自の心理学的三位一体論だけでなく、彼の個人的な信仰も鮮明に表れている。彼の三位一体論は「愛するもの、愛されるもの、愛」という原理にもとづき、神の愛と隣人の愛を信仰と理性によって探求する。この思想は、科学の発達した現代社会において、信仰と理性の調和した愛のキリスト教社会福祉を拓く貴重な知的遺産であると考えている。

キーワード アウグスティヌス 三位一体論 キリスト教社会福祉 七つの聖句

目次

1. 序論
 2. 方法
 3. 結果
 - 3.1 引用件数の集計結果
 - (1) 三位一体論各巻の引用件数
 - (2) 新約聖書各文書の引用件数
 - 3.2 例外的な引用
 - (1) 特に長い引用
 - (2) 意図的に変更された聖句
 - 3.3 最も多く引用されている七つの聖句
 - (1) 聖句を選ぶ方法とその結果
 - (2) 聖句から三位一体論を描く方法
 - (3) 聖句ごとの三位一体論要旨
 4. 考察
 - 4.1 七つの聖句が描く三位一体論
 - 4.2 七つの聖句と三位一体論の関係
 - (1) 信仰の視点にもとづく関係
 - (2) 理性の視点にもとづく関係
 - 4.3 三位一体論とキリスト教社会福祉
 - (1) 信仰の旅路
 - (2) おぼろに映る鏡
 - (3) 愛に根差した社会福祉
 5. 結論
- 凡例
引用文献・注
参考文献
参考資料
図表

1. 序論

本研究は、古代末期に著されたアウグスティヌスの三位一体論をテキスト¹として、キリスト教と社会福祉の基本的な関係を考察することを目的としている。本論は、すでに公表された一連の研究ノートの結果を踏まえ²、新たな視点から考察するものである。

新約聖書にある父・子・聖霊の三つの神が一つの神であるという教えが三位一体論と呼ばれ、キリスト教の最も基本的な思想である。この思想は、カッパドキアの教父たち³を中心に形成され、西暦381年のコンスタンティノポリス公会議によって正式に認められた⁴。最初に書かれた聖書のパウロの手紙から数えると300年以上の時を経ている。

カッパドキアの教父の一人にバシレイオスがいる。彼は三位一体論の形成に決定的な貢献をしただけでなく⁵、世界最古の病院を建設して社会福祉事業を創始した歴史的な人物でもある⁶。キリスト教と社会福祉のかかわりはさまざまな背景のもとに古代から現代に至るまで長い営みがある。本研究は、キリスト教に由来する社会福祉事業の創始と三位一体論の形成が、歴史的な時期や人物において重なっている点に注目している。

アウグスティヌスは4～5世紀のキリスト教確立期に、三位一体論の理論的構築に貢献した最も著名な人物である⁷。彼は、およそ20年の歳月をかけて三位一体論を執筆した(参考資料1)。膨大な議論は難解であり、誰でも容易に理解できるものではない⁸。社会福祉の現実的な課題を考察するにしても、論理体系を明快に表現した手引きが望まれる。

このような観点から、本論では三位一体論テキストで引用されている新約聖書の言葉をすべて抽出して、聖書と三位一体論の関係を考察する。具体的には、抽出した言葉から重要な聖句を選び出し、聖句ごとに関係する三位一体論の議論を集約する。それによって聖書の根柢が明確な部分に焦点を当てた三位一体論が描かれ、それが理解しやすい三位一体論であることを期待している。もとより本研究は神学の研究ではなく、他の教父の三位一体論や著名な神学者の三位一体論の比較検討などは主旨ではない。アウグスティヌスは「信仰と理性」が生涯を決定づけるテーマの一つであったと言われ⁹、第二バチカン公会議(1962～)においても現代の重要なテーマとして引き継がれている¹⁰。本研究は、聖書の言葉が描くアウグスティヌスの三位一体論をとおして、信仰と理性にもとづく愛に根差したキリスト教社会福祉の可能性を探ろうとしている。

本論の目的は、(1)三位一体論で引用されている新約聖書の言葉をすべて抽出し、(2)その中の重要な聖句について三位一体論の議論を集約し、(3)聖句ごとに描かれた三位一体論によって社会福祉との接点を考察することである。

2. 方法

日本語訳テキスト第1巻から15巻まで、全巻について聖書の引用部分を調査して電子データ化した¹¹。旧約聖書も多く引用されているが、三位一体論に直接関係する新約聖書のみを対象とした。本論で使用したテキストには引用聖書の索引が付いている。参考に用いている

英語訳テキスト¹²にも同様な索引があるので両者を比較したところ、理由は不明であるが細部でかなり異なっている。また、引用箇所もページで示されていて使いにくい。そこで今回、改めて日本語訳テキスト全巻について新約聖書の引用箇所を調査することにした。

調査は、テキスト本文中に丸カッコ内に聖書名、章、節が記された箇所を調べ、それをデータベースに入力して行った。テキストには引用や注を明示せずに聖書の言葉が使われる場合も多いので、今回は丸カッコのものに限った。本論で用いる「聖句」という用語は、聖書名、章、節が示す聖書の言葉を意味する¹³。

丸カッコの中は、一節だけの時と最初と最後の節を示した複数節の場合がある。複数節の場合は、それを一つと扱う方法（文単位）と、複数節をすべて節に分けて節ごとに扱う方法（節単位）の二通りの処理方法が考えられる。入力は一単位で行い、すべてを入力した後で機械的に節単位に分割した（表1、2）。本論では統計処理以外は引用聖書の個所が正確に分かる節単位の処理を行っている¹⁴。

統計処理の結果を理解するために、三位一体論の成立、第1巻～14巻のテーマを参考資料にまとめた。全体は第1～7巻と第8～15巻の二つに大きく分かれ、前半は伝統的な三位一体論の理解、後半がアウグスティヌス独自の三位一体論である。後半はさらに三つに分かれ、第8巻から12巻は独自の心理学的三位一体論、第13～14巻はそれらについて聖書あるいは他の思想と比較した議論、第15巻はそれまでの議論をすべて踏まえた完結型の三位一体論である¹⁵。本稿では全巻について新約聖書の引用箇所をすべて調査し、その統計結果から重要な聖句を選び出し、第15巻の議論を中心に具体的な検討を行う。

3. 結果

3.1 引用件数の集計結果

全巻の引用状況を把握するため、電子化したデータを使って各巻および聖書の文書別に集計した結果を以下に示す。

(1) 三位一体論各巻の引用件数

全巻の引用状況を知るために各巻ごとに引用数を集計した（表3、表4）。引用総件数は文単位で782件、節単位で1046件であった。引用数は巻ごとに大きく異なり、第1巻の引用件数が最も多く、次いで第15巻である。各巻ごとに引用数のばらつきは大きく、この違いはテーマの違いによるものと考えられる。例えば、第8～12巻は著者独自の議論が展開されるので引用件数が特に少ない（参考資料2）。著者は第13巻で、それまでに論じた独自の三位一体論を聖書に照らして考察すると語っており、確かに引用数が増加している。

(2) 新約聖書各文書の引用件数

新約聖書の文書ごとに引用数を集計した結果では、ヨハネによる福音書が圧倒的に多く引用されている（表5、表6）。続いて、コリントの信徒への手紙Iが、その半分程度である。文単位と節単位の集計結果の差が、マタイによる福音書は大きく見られる。その理由は複数節の注が多いのが原因であり、節ごとに分けた結果、節単位の数が増加したのである。同様

な事情はルカによる福音書、使徒言行録にも見られる。しかし、どちらの集計でも最も引用されているのがヨハネによる福音書、次がコリントの信徒への手紙Iであるという結果は変わらない。本論は、最も多く引用されている聖書の言葉を探るのが目的なので、どちらの方法でも差し支えないと考えられる。聖書文書別の集計を各巻ごとに行った結果では、ヨハネによる福音書はどの巻でも比較的多く引用されている(表7)。第9巻から11巻で聖書がほとんど引用されていないのは、独自の三位一体論が展開されているためと思われる。本論で扱う第15巻を引用数が最大の第1巻と比較すると、引用数の多い順にヨハネによる福音書、次いでコリントの信徒への手紙Iであることは変わらない。聖書的な根拠は、約20年の執筆期間を経て、当初からあまり変化していないように見える。

3.2 例外的な引用

例外的な引用がいくつかあるので二点指摘する。ひとつは、聖書本文の極めて長い引用、もう一つは、聖書の一部を意図的に変更してテキストに記載した部分である¹⁶。

(1) 特に長い引用

複数の節の引用は全巻で79件ある。この内、特に長いと思われる5節以上を以下に示す¹⁷。長文なので一部省略し総字数を参考に示す。ヨハ1:1-14は、後に詳しく述べるように、アウグスティヌスの三位一体論で最も多く引用されている部分である。特に重要な箇所としてまとめて引用したと思われる。本論では第15巻が議論の対象なので、第15巻以外の聖句は指摘するに止める。

特に長い引用部分

1	節	聖書	引用文	節数 総字数
5	14	I コリ	12:7 一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。・・・12:11 これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。	5節 249字
8	13	II コリ	6:2 なぜなら、／「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた」と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。・・・6:10 悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのように、多くの人を富ませ、無一物のように、すべてのものを所有しています。	9節 445字
13	2	ヨハ	1:1 初めに言 ¹⁸ があった。言は神と共にあった。言は神であった。1:2 この言は、初めに神と共にあった。1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。1:4 言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。1:5 光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。・・・1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。	14節 487字
15	33	ヨハ	4:7 サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください・・・4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」	8節 470字

(2) 意図的に変更された聖句

アウグスティヌスは使徒言行録17:27-28の一部の語を変更して繰り返し使用している。この件は既にノートで指摘したが、今回の調査でその箇所を改めて確認した。これらは第14巻以前にあるので第15巻を中心に論ずる本稿では扱わないが、変更の意図は重要なので考察で若干触れる¹⁹。

使徒言行録17：27－28²⁰

17:27これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。17:28皆さんのうちのある詩人たちも、

『我らは神の中に生き、動き、存在する』

『我らもその子孫である』と、

言っているとおりです。

意図的な変更部分

巻	節	引・注	三位一体論本文と注の記述（日本語訳テキスト通り）	
①	4	3	注	それは私たち一人一人から遠く離れて置かれているのではない。実に私たちはその生命の中に生き、動き、在るのである。（使17:27, 28）。
②	4	23	注	— 私たちはこの創造主においてこそ生き、動き、存在する（使17:28）—
③	8	5	注	だから、この善は私たち各自から遠く離れて在るのではない。私たちはこの善の中に生き、動き、存在する（使17:27, 28）からである。
④	14	16	引用	使徒が言うように、神は、「わたしたち各自から遠く離れていますのではない」（使17:27）。使徒はさらに付加して、「なぜなら、私たちは神の中に生き、動き、在るからである」（使17:28）と言う。
⑤	14	21	注	神は全体として偏在したまうのである。このゆえに、精神〔人間〕は神の中に生き、動かされ、存在するのである（使17:28）

注：⑤聖書本文中の〔人間〕は訳者が付したものの。

変更の詳細

①	「神」の中に生き	→	その「生命」の中に生き（使17:28）
②	「神」の中に生き	→	この「創造主」においてこそ生き（使17:28）
③	「神」は	→	この「善」は（使17:27）
	「神」の中に生き	→	この「善」の中に生き（使17:28）
④	変更なし		
⑤	「我ら」は神の中に生き	→	「精神」は神の中に生き（使17:28）

3.3 最も多く引用されている七つの聖句

電子化されたデータを使って第15巻で最も多く引用されている聖句を探し出し、それらが第15巻の議論とどのように関係するか、その方法と結果について論ずる。

(1) 聖句を選ぶ方法とその結果

方法で述べたように本稿は第15巻を対象としている。そこで第15巻引用聖句172件から重要な聖句を選ぶ(表7)。まずこれらを、第14巻以前でも引用されているものと、第15巻のみ引用されているものに分離した(表8)。第15巻で初めて引用される聖句より、それ以前から引用されているものの方が重要だと考えたからである。その結果、第14巻以前でも引用されているものが84件(表8a)、第15巻のみは88件(表8b)であった。次に、これらを引用件数の多い順に並べ替え、それぞれの聖句にはすべての引用箇所を付帯情報として付けて一覧にした(表9, 表10)。引用数と引用箇所の両方を確認して選ぶためである。この一覧を見ると、第15巻で引用の多い聖句は第1巻~14巻でも概ね引用が多いと言える(表9)。そこで、今回はこの中から第15巻で3回以上引用されている聖句を選んだ。以下の七つが該当し、それぞれの第15巻および全巻における引用数を括弧内に順に示した²¹。

I コリ13:12 (15, 33)、ヨハ1:14 (4, 18)、ヨハ1:3 (3, 13)、

I ヨハ3:2 (5, 13)、ヨハ15:26 (3, 10)、ロマ1:20 (3, 8)、

I ヨハ4:16 (3, 7)

(2) 聖句から三位一体論を描く方法

私たちはキリスト教に関する考えを語る時に、しばしば聖句を引用することがある。このようなことはごく普通のことである。アウグスティヌスも同じような形で聖句を引用している。本論の副題とした「七つの聖句が描く三位一体論」は、それとまったく逆の発想である。聖句を中心にアウグスティヌスの三位一体論を語るのである。このような聖句を中心に語る形式は教会の礼拝説教にしばしば見られる。しかし、アウグスティヌスの三位一体論は極めて実証科学的なので、聖句を中心に科学的理論を語ることは教会ではあまり例がないと思う。信仰的な表現をすれば、七つの聖句の光を三位一体論に照らすということである。あるいは、聖句の三位一体論的解釈と言えるのかもしれない。いずれにせよ、選ばれた聖句から三位一体論を描く具体的方法を以下に示す。

選ばれた聖句は以下の七つである。引用数の多い順ではなく第15巻で引用された順になっている。聖句には短いタイトルを付けた。本論の他の箇所でも引用する際に内容を容易に思い出すことができるようにするためである。

①被造物を通して知る神(ロマ1:20)

世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。

②神の愛(Iヨハ4:16)

わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってくださいます。

③鏡におぼろに映ったもの（I コリ13:12）

わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには²²、顔と顔とを合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。

④御子に似た者（I ヨハ3:2）

愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。

⑤肉となった言（ヨハ1:14）

言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。

⑥言によって成った万物（ヨハ1:3）

万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。

⑦父と子から遣わされる弁護者（ヨハ15:26）

わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。

七つの聖句と第15巻議論との関係を調べる為、聖句の引用部分の要旨を節ごとにまとめる。まとめる順序は、第15巻議論の流れに沿って引用された聖句の順に行く。引用箇所および引用聖句を記した第15巻目次を作成し、すべての引用箇所を示した（表11）。

このように一つの節に七つの聖句のいずれかが重複して引用される場合はかなり多い（表12）。七つの聖句はバラバラではなく、相互に関係を持って三位一体論の中で有機的に機能しているのである。一つの節に重複している聖句については議論の主旨と聖句の関係を慎重に判断してまとめる必要がある²³。

（3）聖句ごとの三位一体論要旨

上記の方法にもとづき、七つの聖句ごとにまとめた第15巻の節単位の要旨を以下に示す。聖句は括弧で表示し、引用された七つの聖句のすべてが、いずれかの節に記載されているはずである（表13）。一つの節に重複して引用されている聖句については、まとめを省略した部分にはまとめ先を明示して対応関係が分かるようにした。文章は第15巻の内容を忠実に反映させるため、できるだけテキスト本文を引用し、引用部分は「」を付けた。引用箇所が離れて話が飛躍する場合は最小限の補足を行っている。

①被造物を通して知る神（ロマ1:20）

15:3 論究を積み重ねて人間の精神に神を求めることに到達した。

「私たちはこんなにも長く神が創られたものの周りに低徊してしまった。それは神が創られたものとおして神を知りまつるためであった。実に『世界が造られたときから、目に見

えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。』(ロマ1:20)「これまでの探求、すなわち「先ず被造物において、それ固有の或る種の三一性をとおして、いわば段階的に上昇し、遂に人間の精神にまで到達し、そして私たちが神を問い求める」ことは「無意味で空しいと評価しない。」

15:10 神に対する言表の考察を経て人間の精神の内に三一性を見出す。

「私たちの知解力に三位一体があらわれ始めたところを想起しようとするなら、それは第8巻である。」「あの限りなく極めて卓説した、変わらざる本性を知解することに言論によって高めようと努めた」が、「私たちにはまだ三位一体はあらわれなかった。」「しかし、私たちが聖書において、『神は愛です。』(Iヨハ4:16)と言われるその愛に到達したとき、三位一体が愛するもの、愛されるもの、愛という三一性と共に微光を放った。」だが、「私たちの精神の弱さが未だそれに到達しえないことが或る仕方では確認されたゆえに、私たちは論議の途中で、神の似姿として造られた(創世1:27)私たちの人間の精神そのもの」に戻り、「第9巻から第14巻まで」、「目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知る」(ロマ1:20)のために「知解力を修練した。」

15:39 精神の記憶、知解力、意志に見出す三位一体の似姿。

「この第15巻で私は聖書に準拠して信者には十分なほど聖霊について語ってきたと思う。」「このことは今までも、やはり同じ聖書に準拠して真理であると教示したのである。また神が創造したまうた被造物の考察によって、私に可能な限り、このような真理について理性的な根拠を要求する人々に対して、神の不可視性を造られたものとおして、彼らが出来る限り、知解によって(ロマ1:20)、見るように勧めた。特に、神の似姿によって造られた理性的・知解的な被造物をおして、またいわば鏡をおして(Iコリ13:12)のように、出来るなら、出来る限り、神なる三位一体を、私たちの記憶、知解力、意志において認めるように勧めた²⁴。記憶、知解力、意志というこの三つを各自は自分の精神において本性的に神的に配置されたものとして、」「記憶によって想起し、知解によって直視し、愛によって抱擁するのである。そこに、精神は確かにあの至高なる三位一体の似姿を見出す。精神は自分が生きていること全体をこの至高の三位一体を想起し、見、愛することに、それを想い、それを観想し、それを悦ぶように関係づけなければならない。しかし、その同じ三位一体によって造られたが、しかも自己の悪徳によって、より悪いものに替えられたこの似姿を、すべての点で似ていると思うように、あの三位一体に比較せず、むしろ、いくらかの類似において非常な不類似を見るように、私たちは十分と思われるほど勧めてきたのである。」

②神の愛 (Iヨハ4:16)

15:5 第1巻から14巻で証明されたこと。

「第1巻では聖書によって、あの至高なる三位一体の(父・子・聖霊と三つにして一つの神に、神としての差を認めない)統一性と等しさが示される。第2巻、第3巻、第4巻も同じテーマが取り扱われている。」第8巻でも、同じテーマについて「根拠を提示して知解する人々にも明らかにしたのである。次に私は知解されて観られる真理によって、また、すべ

ての善の根拠である至高善によって、さらに義なる精神が、未だ義ならざる精神によっても愛される義によって、たんに非物体的な本性であるだけでなく、不可変的な本性でもある神が、可能な限り、知解されることを示した。また聖書の中で神であると言いつた愛（Ⅰヨハ4:16）によってもその神は知解されることを示した。この愛によって知解する人々に、愛するもの、愛されるもの、愛というように、いかに微妙とはいえ三位一体があらわれ始めたのである。」

15:10 神に対する言表の考察を経て人間の精神の内に三一性を見出す。

①被造物を通して知る神（ロマ1:20）参照。

15:27 聖霊が愛なる神である。

「聖霊は聖書によると、ただ父に属するだけでなく、また子にだけ属するのでもなく、父と子に属する。それゆえ、聖霊は父と子が互いに愛し合われるその共通の愛を私たちに示唆する。」「聖書は、聖霊は愛なりとは語らなかった。」「聖書は、『神は愛です。』（Ⅰヨハ4:16）と語ったのである。」「父なる神が愛であるのか、それとも子なる神が愛であるのか、また聖霊なる神が愛であるのか、あるいは三位一体の神が愛であるのか、ということは極めて不確かであり、それゆえ、尋求しなければならない。私たちは聖書において、神は愛なり、といわれるのは、愛そのものが神の名称にふさわしい実体であるからではない。」「『主よ、あなたはわたしの希望。』（詩71:5）と神について語られているように、」「希望は神の実体であるということの意味しているのではなく、『神にのみ、わたしは希望をおいている。』（詩62:6）と他の箇所で見られるように、神から私たちのところに希望が来ることを意味する²⁵。』

③鏡におぼろに映ったもの（Ⅰコリ13:12）

15:14 パウロの言葉「鏡におぼろに映ったものを見る」を解釈する。

「パウロほどの偉大な霊的な人が、『わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔とを合わせて見ることになる。』（Ⅰコリ13:12）と言っている。もし、私たちがこの鏡とはいかなる性質のものか、また何であるか、ということ問い求めるなら、たしかに鏡において見ているものは似姿に他ならないことに気づく。だから、私たちは自身でもあるこの似姿によって、あたかも鏡をとおしてのように、私たちが創られたお方を何とかして見まつろうと努めているのである。』

15:20 私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。

⑤肉となった言（ヨハ1:14）参照

15:20 私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。

⑥言によって成った万物（ヨハ1:3）参照

15:21 私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。

「だから、私たちの似姿がこのようにかたがたが変えられ完全に至るまで新しくされるであろうとき、私たちは神に似るものになるであろう。なぜなら、私たちは『鏡におぼろに映ったもの』（Ⅰコリ13:12）ではなく、その真実の御姿を見まつるであろう（Ⅰヨハ3:2）から。

このことを使徒パウロは『顔と顔とを合わせて見る』（Ⅰコリ13:12）と言っているのである。しかし今はこの鏡において、『おぼろに映ったものを見て』（Ⅰコリ13:12）、この貧弱な類似において、どんなに不類似も存在することであろうか。誰がそれを解明し得ようか。それにも拘わらず私は自分に可能な範囲で、人がそのことに注目するようにいくらかは触れたいのである。」

15:22 神は創造する以前から創造するものを知っている。

「父なる神が或るものは御自分の身体感覚によって、或るものは御自身によって得られた、と言えようか。理性的動物としてではなく、理性的な魂を超えていますお方として神を思念う人は、どうしてこのように主張しようか。神をすべての精神の上におく人々によって、もちろん、彼らはまだ顔と顔を合わせて（Ⅰコリ13:12）、ありのままの御姿を見まつる（Ⅰヨハ3:2）のではなく、鏡をとおして謎において（鏡におぼろに映ったものにおいて）（Ⅰコリ13:12）理性的に見るのであるが、神は思惟され得るのである。」

15:24 父から生まれた御言葉と私たちの内的に語る言葉は似ている。

「あの私たちの言葉に戻ろう。それは音声や音声の思惟をもたず、私たちが見ることによって内的に語るものの言葉であって、それゆえ、いかなる言語にも属さない。この言葉は神である神の御言にこの謎（鏡におぼろに映ったもの）において（Ⅰコリ13:12）いくらかは似ているのだ。というのは、この言葉は神の御言が父の知から生まれたように、私たちの知識から生まれるからである。だから、神の御言にいくらかは似ている、と私たちが見出すこのような私たちの言葉を、だが、どんなに神の御言に似ていないか、私たちが語り得るように、考察するのに躊躇してはならない。」

15:26 神は人間のように思惟から言葉を生むのではない。

④御子に似た者（Ⅰヨハ3:2）参照

15:27 聖霊が愛なる神である。

「私たちは、この鏡をとおして、この謎（鏡におぼろに映ったもの）において（Ⅰコリ13:12）見ることが出来た限り、父と子について十分に語った。今や神が私たちに見ることが許したまう限り、聖霊について論議しなければならない。」

15:39 精神の記憶、知解力、意志に見出す三位一体の似姿。

①被造物を通して知る神（ロマ1:20）参照。

15:40 意志または愛は記憶と知解に由来する。

「たしかに、父なる神と子なる神、言い換えると、「御自身と等しく永遠である御言によって語り出した産出者と、「御父の御言なる神を顔と顔を合わせて（Ⅰコリ13:12）ではなく、謎（鏡におぼろに映ったもの）におけるこの類似をとおして、私たちの精神の記憶と知解力においていくらかは推測することによって見るように、私は出来る限り、意味表示しようと心を配ったのである。」

15:41 意志または愛は記憶と知解に由来する。

「しかし聖霊については、私は一層強力な意志である私たちの意志、あるいは愛こそ聖霊

に似ているように見えるということ、この謎（鏡におぼろに映ったもの）において（**Ⅰコリ13:12**）示したのである。なぜなら、私たちに本性的に存在している意志は、私たちがひきつけたり反発させる事物が意志に接近し、出遭うにしたがって種々なる情念をもつからである。」

15:44 私たちの三つの能力が神の似姿であり神を見ることが出来る。

「神の三位一体を『顔と顔とを合わせて』と私たちに約束されている神直視が訪れたとき、私たちの現在の状態を示すこの似姿よりもずっと明らかに確実に見まつるであろう。しかも、『この鏡をとおして』『この謎（おぼろに映ったもの）において』、この生において見ることが許されている限り、見ている人々は私たちが詳論し提示したあの三つの能力を、その精神において認める人々ではなく、その精神をいわば似姿として見る人々であり、そのようにして彼らが見るものを精神がその似姿であるお方に或る仕方に関係させ得るのである。そして彼らが認めることによって見る似姿をとおして予感することによってではあるが、神を見得るのである。まだ、『顔と顔とを合わせて』神を見ることが出来ないからである。実に使徒は、『今、私たちは鏡を見ている』と語るのではなく、『今、私たちは鏡をとおして見ている（わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている）』（**Ⅰコリ13:12**）と語るのである。」

「だから、見られ得るだけ自分の精神を見、また、その精神において私に出来るかぎり、多くの仕方でも論じたあの三一性を見るが、しかも、その三一性が神の似姿であると信ぜず、また知解しない人々は、なるほど鏡を見ている。しかし今、鏡をとおして見られるべきであるお方を鏡をとおして見ていないのである。彼らが見ているその鏡は鏡、言い換えると似姿であることを知らないのである。もしそのことを知っていたなら、おそらく彼らは、精神がその鏡であるお方を、今は鏡をとおして見るが、顔と顔を合わせて見得るように、鏡をとおして問い求め、鏡をとおして、暫くの間、いくらかでも見なければならぬと、偽りのない信仰と清らかな心（清い心と正しい良心と純真な信仰）によって（**Ⅰテモ1:5**）悟るであろう。

④御子に似た者（**Ⅰヨハ3:2**）

15:14 パウロの言葉「鏡におぼろに映ったものを見る」を解釈する。

使徒パウロが鏡におぼろに映ったものについて「次のような言葉で意味表示している。『わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。』（**Ⅱコリ3:18**）「使徒は『主と同じ姿に造りかえられていく』と言う。『同じ姿』というその言葉で神の似姿を意味しようとしていたことは確かであり、それは私たちが鏡で見ているあの似姿である。」「『栄光から栄光へ』という言葉は他の仕方でも、すなわち、信仰の栄光から直視の栄光へ、また、私たちが神の子らとならしめる栄光から私たちが彼に似させるであろう栄光へ—御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るから（**Ⅰヨハ3:2**）—と知解され得る。」

15:21 私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。

③鏡におぼろに映ったもの（Ⅰコリ13:12）参照

15:22 神は創造する以前から創造するものを知っている。

③鏡におぼろに映ったもの（Ⅰコリ13:12）参照

15:26 神は人間のように思惟から言葉を生むのではない。

「それだから、この謎（鏡におぼろに映ったもの）において（Ⅰコリ13:12）、今、私たちの言葉の神と神の御言に対する不類似がどんなに大きいか—しかも私たちが見たように或る種の類似がそこにあるのだ—を見たから、『そのとき御子をありのままに見る』（Ⅰヨハ3:2）とき、『御子に似た者となる』（Ⅰヨハ3:2）あの時も—この言葉を語った人はたしかに私たちの現在持つ不類似に注目している—、私たちは本性的に彼に等しくないであろうということ承認しなければならない。造られた本性は創造する本性より常に小さいから。」

⑤肉となった言（ヨハ1:14）

15:20 私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。

「外的に響く言葉は内的に閃く言葉の徴であり、この内なる言葉こそ言葉の名にふさわしいのである。」「私たちの言葉は神の御言が肉に造られて（ヨハ1:14）人間の感覚にも御自身が明かにされるように肉を受取られたのに似て、人間の感覚に明らかにされるよう音声を受取って或る仕方では身体の声となる。」「この人間の或る種の類似によって、『おぼろに映ったもの』（Ⅰコリ13:12）のように神の御言が幽かではあるが見得るのである。」「この類似によって見ようと問い求めている神の御言は、『言は神であった。』『万物は言によって成った。』（ヨハ1:3）、『言は肉となって』（ヨハ1:14）」と言われる御言である。

15:46 イエス・キリストは神性において聖霊を与え人間として聖霊を受けられる。

「主イエス御自身が神として聖霊を与えられるだけでなく、人間として聖霊を受けられる。だから聖書に主は、恩恵（恵み）（ヨハ1:14）と聖霊（ルカ2:52、4:1）に満たされていると語られているのである。『使徒行伝』では、もっと明らかに主について、『つまり、ナザレのイエスのことです。神は、聖霊と力によってこの方を油注がれた者となさいました。イエスは、方々を巡り歩いて人々を助け、悪魔に苦しめられている人たちをすべていやされたのですが、それは、神が御一緒だったからです。』（使10:38）と記されている。勿論、目に見える油によってではなく、恩恵の賜物によってではあるが、それは教会がバプテスマされた者に塗油する聖油によって可視的に意味表示される。バプテスマを受けたキリストの上に聖霊が鳩のような姿で降臨したとき（マタ3:16）、キリストは聖霊によって塗油されたのではない。あのときは聖霊はキリストのからだ、言い換えると、彼の教会を予示しようとされたのである。この教会において、とりわけバプテスマされたものは聖霊を受ける。しかし、神の御言が肉としてつくられた（ヨハ1:14）とき、言い換えると、人間性が善き業の或る先行的な功績なくして、御言なる神に、彼と共に一つのペルソナが生じるように処女マリアの胎内で結合されたとき、あの神秘的な不可視的な塗油によって塗油された、と理解すべきである。このゆえに、私たちはキリストは聖霊と処女マリアから生まれたまうた、と告白するのである。主が三十歳近くになられたときはじめて、聖霊を受けた—その年にヨハネからバプテスマを

受けられたのである（ルカ3:21-23）—と信じることは、きわめて理に適わない。むしろ主がバプテスマを受けにヨハネのところに来られたとき、全く罪なくして聖霊を持っておられた、と信じるべきである。」「聖書は、『イエスは神の右に上げられ、約束された聖霊を御父から受けて注いでくださいました。』（使2:33）とキリストについて語っていることに人間性と神性が示されている。たしかにキリストは人間として聖霊を受けられ、神として私たちに聖霊を注ぎたまうたのである。』

⑥言によって成った万物（ヨハ1:3）

15:20 私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。

⑤肉となった言（ヨハ1:14）参照

15:20 私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。

「私たちはこの『おぼろに映ったもの』（I コリ13:12）において神の御言とその他の類似にも注目しなければならない。この御言について、『万物は言によって成った。』（ヨハ1:3）と記されているように—そこで、神は御自分の独り子なる御言によってすべてのものを創造されたと述べられている—、先ず心において語られない人間の業は存在しないのである。『然り、然り、否、否』がそこでも守られるように善き業の知識から生まれるとき真実の言葉がある。』

「私たちの言葉の類似において神の御言のこの類似がある。というのは、私たちの言葉はそれに業が随伴することがなくても存在し得るが、業は言葉がそれに先行しなくては存在し得ない。同じように、神の御言は被造物が現存しなくとも存在し得るが、被造物は万物の創造の根拠である、あの御言なくしては存在し得ない。」

「神の御言である御子だけが肉として造られた結果—勿論、それは三位一体の御業ではあるが—私たちの言葉は彼の範型にしたがい、それにならうとき、正しく生きる。」「虚偽を持たないのである。たしかに、この似姿の完成は将来のいつの日か為される。この完成に到達するために、善き師は私たちをキリスト教の信仰と敬虔の教えによって教導したまう。」「『わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。』（II コリ3:18）」とあるように「変えられるためである。」

15:38 精神の記憶、知解力、意志に見出す三位一体の似姿。

「エウノミウスは御言によって万物は造られたが、その神の唯一なる御言（ヨハ1:3）が、本性において神の御子であること、言い換えると御父の本性、あるいは実体、本質の子ではなく、神の意志の子であると語ったのである。」「これは、私たちが前には意志しなかったことを意志することがあるという私たち自身の経験に示唆された考えである。」「『人の心には多くの計らいがある。主の御旨のみが実現する。』（箴19:21）という聖句は、神は永遠であるように、そのはかりごととも永遠であり、したがって御自身があるように、そのはかりごととも変わらないことを私たちが理解し、信じるためにあるのである。」「つまり、人の心には多くの意志がある。されど主の意志は永遠に留まるのである。」

⑦父と子から遣わされる弁護者（ヨハ15:26）

15:45 父と子とから聖霊が発出する。

「聖霊について御子は『わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊』（ヨハ15:26）と言われ、また他の箇所では、『弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊』（ヨハ14:26）と言われる。この二つの箇所から、御霊は御父と御子の両者から発出する、と教えられるのである。」「また、御子は死人の中から復活し、弟子たちにあらわれたとき、息を吹きかけて、『聖霊を受けなさい。』（ヨハ20:22）と言われ、したがって聖霊が御子からも発出することを示しておられる。また、御霊は福音書の中で読まれるように、『イエスから力が出て、すべての人の病気をいやしていた。』（ルカ6:19）からである。』

15:48 三位一体において生誕と発出を区別するのは難しい²⁶。

「もし聖霊が御父と御子とから発出するならば、なぜ、御子が“聖霊は父から発出する”（ヨハ15:26）と言われたのであろうか。」「御子は、“わたしの教えは、自分の教えではなく、わたしをお遣わしになった方の教えである。”（ヨハ7:16）と言われるのである。」「“聖霊は父から発出する”と語られる箇所で、聖霊は彼からも発出すると理解されるべきではないであろうか。御子はその神であること—御子は神からの神であられる—を受取るお方から、聖霊が御子からも発出する、ということを受取るのである。」「ここで、なぜ聖霊は生まれた、と言われず、むしろ発出すると言われるのか」「もし御霊が子といわれるなら、たしかに彼は父と子の子といわれるであろう。このことは全く道理に合わない。」「聖霊は父から子の中へ発出するのではなく、また子から被造物を聖化するために発出するのでもない。たとい御父が御子に、聖霊が御自分から発出するように御子からも発出するようにさせたまうにしても、聖霊は、両者から同時に発出するのである。」「御父が御自分のうちに生命を持ち、御子にも御自分のうちに生命を持つようにしたまうように、生命が御自分から発出するように御子からも発出するようになったまうのである。』

15:51 この書に書かれたものが主に由来することを祈る。

「われらの神、主よ、あなたにおいて私たちは父と子と聖霊を信じます。『あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。』（マタ28:19-20）とイエスが言うのは、あなたが三位一体の神だからです。」「主なる神よ、あなたは主なる神ならざるものの名において、私たちがバプテスマを受けるようにお命じになりません。もし、あなたが、一つなる主なる神でいるように、三位一体でなければ、『聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一の主である。』（申命6:4）と神の御声で語らないでしょう。またもし、あなたがペルソナの区別なく父なる神御自身であり、あなたの御言なる御子イエス・キリスト御自身であり、あなたがたの聖霊であるなら、真理の書において、私たちは、『神が御子を遣わされた』（ガラ4:4、ヨハ3:17）と読まないでしょう。また、独り子なるあなたよ、あなたは聖霊について、『父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊』（ヨハ14:26）、また、

『父のもとから出る真理の霊が来るとき』（ヨハ15:26）とは言われなんでしょう。』

4. 考察

4.1 七つの聖句が描く三位一体論

結果では、七つの聖句ごとに引用部分の内容を節単位でまとめた。ここではさらに複数の節の内容を聖句ごとに一つにまとめ最終的な形にする。アウグスティヌスを一人称とした「です・ます調」とし、できるだけ簡潔な表現とする。

①被造物を通して知る神（ロマ1:20）

聖書によれば、自然界は目に見えない神が創造した被造物です。神の永遠の力と神性は神が創造した被造物に現れています。それは誰でも知ることができますから、神を知らないなどと誰も言い訳は出来ませんし、知ることには価値があると思っています。

神の変わらざる本性を言論によって知解しようとしても、三位一体はなかなかあらわれませんでした。大きな転機は、「神は愛です。」と語る聖書の言葉に達したときに起こりました。三位一体が愛するもの、愛されるもの、愛という三つが一体的に働く性質と共に微光を放ったのです。しかし、それを十分認識することは困難でした。そこで、神の似姿として造られた人間の精神そのものに問い求めることにしました。目に見えない神の性質が被造物である人間の精神に現れていると信じて知解力を修練したのです。

私は、真理について理性的な根拠を要求する人々には被造物の考察によって、知解によって神を見るように説明してきました。そしてできるなら、鏡を通して見るように、精神の記憶、知解力、意志に三位一体の似姿を見ることを勧めました。しかし、同じ三位一体が悪徳の似姿を造ることは誰にでも分かります。そこで、精神の三位一体を神と比較するのではなく、むしろいくらかの類似において非常な不類似を見るように説明したのです。

②神の愛（Iヨハ4:16）

私たちの信仰は、父・子・聖霊と三つにして一つの神に差を認めません。私は、知解されて観られる真理によって、また、すべての善の根拠である至高善によって、さらに義によって、不可変的な本性でもある神が、可能な限り、知解されることを示しました。また聖書の中で神であると言い表されている愛によってもその神は知解されることを示しました。この愛によって知解する人々に、愛するもの、愛されるもの、愛というように、いかに微かとはいえ三位一体があらわれ始めたのです。

聖霊は聖書によると、ただ父に属するだけでなく、また子にだけ属するのでもなく、父と子に属します。父と子が互いに愛し合われるその共通の愛を私たちに示唆します。神は愛なり、といわれるのは、愛そのものが神の名称にふさわしい実体というのではなく、聖書の他の箇所、神から私たちのところに希望が来ると読まれるように、神から私たちのところへ愛が来るのです。

③鏡におぼろに映ったもの（Iコリ13:12）

聖書に多くの手紙を残した偉大な使徒パウロさえ、わたしたちは、今は、鏡におぼろに

映ったものを見ていると語ります。しかし終わりのときには、顔と顔を合わせて見ることになります。鏡に映ったものとは神の似姿です。私たちは、何とかしてこの似姿によって創造者である神を見ようと努め、変えられ、新しくされ、神に似るものになるのです。今は鏡に映ったものがたとえ貧弱であっても、可能な範囲で人がそのことに注目するようにいくらかは触れたいのです。神をすべての精神の上におく人々によって、もちろん、彼らはまだ顔と顔を合わせて、ありのままの御姿を見るのではなく、鏡におぼろに映ったものにおいて理性的に見るのですが、神について考えることは可能なのです。

私たちが見ることによって内的に語るものの言葉であって、いかなる言語にも属さないこの言葉は、神である神の御言にいくらかは似ているのです。というのは、この言葉は神の御言が父の知から生まれたように、私たちの知識から生まれるからです。私は鏡におぼろに映った類似をとおして、父なる神と子なる神が、精神の記憶と知解力において、いくらかは推測して見るように心を配ったのです。聖霊については、私は鏡におぼろに映ったものにおいて、人間の意志、あるいは愛こそ聖霊に似ていることを示しました。なぜなら、私たちに本性的に存在している意志は、私たちをひきつけたり反発させる事物が意志に接近し出遭うにしたがって種々なる情念をもつからです。

私たちは、顔と顔を合わせて神を見るまでは、この鏡をとおしておぼろに映った神の似姿を、精神の記憶、知解力、意志の三つの能力において、多くの仕方で論じたあの三一性を見るのです。もし、人がそのことを知っているならば、かの時に顔と顔を合わせて見得るように、鏡をとおして問い求め、暫くの間いくらかでも見なければならぬと、清い心と正しい良心と純真な信仰によって悟ることでしょう。

④御子に似た者（Iヨハ3:2）

使徒パウロは、わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていくと言います。私たちは、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。しかし、その時も、私たちは本性的に彼に等しくないであろうということを承認しなければなりません。造られた本性は創造する本性より常に小さいからです。

⑤肉となった言（ヨハ1:14）

使徒ヨハネは、イエス・キリストを肉に造られた神の御言と言います。神の御言が人間の感覚に明らかになったのがイエス・キリストということです。私たちが言葉を語る時、精神の中には言語になる前の内なる言葉というようなものがあって、その内なる言葉と外的に発する言葉との関係は、神の御言とイエス・キリストの関係と似ているのです。

使徒ヨハネは、肉となった言であるイエス・キリストは恵みと真理とに満ちて生まれたと語ります。人間として善き業の実績などとはまったく無関係に処女マリアから生まれました。イエス・キリストは生まれた時から、全く罪なくして聖霊を持っていたと信じられるのです。

⑥言によって成った万物（ヨハ1:3）

使徒ヨハネは、神の御言によって万物が造られたと語ります。神の御言と私たちの言葉は他の点でも類似性があります。万物が御子によって造られたように、心において語られない人間の業は存在しません。善き業の知識がなければ真実の言葉も生まれません。神の御言である御子が肉として造られたことは、私たちの言葉がイエス・キリストにならうとき正しく生きることを意味します。人の心には、多くの意志がありますが、神の意志は永遠に変わらず留まるのです。私たちは主と同じ姿に造り変えられていき、将来のいつの日か完成されます。

⑦父と子から遣わされる弁護者（ヨハ15:26）

聖霊について御子は「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊」（ヨハ15:26）と言われ、また他の箇所では、「弁護者、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊」（ヨハ14:26）と言われます。この二つの箇所から、御霊は御父と御子の両者から発出すると理解できます。子と聖霊は父の二つの子ではありません。聖霊は、父と子から同時に発出する父と子の命のようなものです。

聖書では、子は誕生したと表現され、聖霊は発出したと表現されます。この違いを三位一体の神において区別することは困難ですが、記憶と知解力と意志の三位一体の考え方ではこの違いをおぼろに見ることが出来ます。人間の思考は記憶しているものを使って為されます。そして、思考は人に伝えられるような具体的なイメージを造ります。この過程において、意志は記憶とイメージを結ぶように働きます。愛に根差した強い意志が働くこともあります。思考がイメージを生むことと、思考から意志が発出するという違いに、子が誕生し聖霊が発出する違いを見ることができます。

4.2 七つの聖句と三位一体論の関係

上記の七つの聖句が描く三位一体論では聖句が多様に用いられている。そこで聖句と三位一体論の関係を信仰の視点と理性の視点に分けて理解する。

(1) 信仰の視点にもとづく関係

七つの聖句で使用されている記述を、「過去・現在・未来」に分類する²⁷。

表4.2-1 七つの聖句にある過去・現在・未来の言葉

	聖句の中の言葉	聖句
過去	世界が造られた時から、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れている。	①ロマ1:20
	言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。	⑤ヨハ1:14
	それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。	⑤ヨハ1:14
	万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。	⑥ヨハ1:3
現在	私たちは被造物を通して神を知ることができます。	①ロマ1:20
	私たちには弁解の余地がありません。	①ロマ1:20
	私たちは、私たちに対する神の愛を知り、信じています。	②Iヨハ4:16
	愛にとどまる人は、神の内にとどまります。	②Iヨハ4:16
	神もその人の内にとどまります。	②Iヨハ4:16
	私たちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ています。	③Iコリ13:12
	私たちは、今は一部しか知りません。	③Iコリ13:12
	私たちは、今既に神の子です。	④Iヨハ3:2
未来	自分がどのようになるかは、まだ示されていません。	④Iヨハ3:2
	その時には、顔と顔を合わせて見ます。	③Iコリ13:12
	その時には、はっきり知られているようにはっきり知ります。	③Iコリ13:12
	御子が現れる時、御子に似た者となります。	④Iヨハ3:2
	その時、御子をありのままに見ます。	④Iヨハ3:2
	父のもとから遣わそうとしている弁護者が証をなさるはずです。	⑦ヨハ15:26
	父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずです。	⑦ヨハ15:26

過去は、天地創造とイエス・キリストの出来事である。世界は御言なる子によって創造され、子はイエス・キリストとなってこの世に現れた。現在は人間の歴史である。御言によって造られた人間は神を鏡におぼろに映ったものとして見る。人間の歴史の先にある未来に、私たちは御子に会える。弁護者である真理の霊は今私たちに働き、その時にふさわしくなるように私たちを変えてくださる。もちろん聖書すべてが規範であることは言うまでもないが、七つの聖句からキリスト教教理の基本を概観することができる。

次は、一般的には過去・現在・未来に分類できない永遠に属する信仰的表現である。しかし、この中には良く知られた人間に属する言葉も混在している。この点は、三位一体論の本質と深く関係するので、この節の最後に論じる。

表4.2-2 七つの聖句にある永遠に属する言葉

永遠	目に見えない神の性質。	①ロマ1:20
	神の永遠の力と神性。	①ロマ1:20
	言。	⑤ヨハ1:14
	恵みと真理。	⑤ヨハ1:14
	神は愛。	②Iヨハ4:16
	弁護者。	⑦ヨハ15:26
	真理の霊。	⑦ヨハ15:26

(2) 理性の視点にもとづく関係

アウグスティヌスは、「知らないものは愛せない。」、しかし「知らなくても愛することができる。」と語る。さらに「神を知らなければ愛せないなら、神を愛する人は誰もいない。」とも語る²⁸。そこで、七つの聖句にある「知らないもの」を整理する。誰でも見えないものは知らないことが多いので、絶対不可視の存在、不可視の存在、可視の存在に分ける。パウロは被造物を通して神を知ると聖書で当初から語っているので（ロマ1:20）、今回は新約聖書の書かれた順に整理する²⁹。

表4.2-3 七つの聖句にある三位一体に関係する言葉

聖句の中の言葉	絶対不可視の存在	不可視の存在	可視の存在
③わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はっきり知られているようにはっきり知ることになる。（Iコリ13:12）	神	鏡 おぼろに映ったもの そのときの神の顔 そのときのわたしたちの顔	わたしたち
①世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。（ロマ1:20）	神	神の性質 神の永遠の力 神性 弁解	世界 被造物 彼ら
⑥万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。（ヨハ1:3）	子	言	万物
⑤言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。（ヨハ1:14）	父子 聖霊	言 栄光 父の独り子 恵み 真理	肉 わたしたち
⑦わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである。（ヨハ15:26）	父子 聖霊	イエス・キリスト 弁護者 真理の霊 証し	あなたがた
④愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子ですが、自分がどのようになるかは、まだ示されていません。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者となるということを知っています。なぜなら、そのとき御子をありのままに見るからです。（Iヨハ3:2）	神子	愛 神の子 (将来の)自分の姿 (将来)現れる御子 御子に似た者	わたしたち
②わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。（Iヨハ4:16）	神	神の愛 愛にとどまる人 神の内にとどまる人 人の内にとどまる神	わたしたち

不可視の存在を見える人もいるかもしれないが、筆者にはほとんど見えないものばかりである。しかし、その中にはなじみ深い言葉も多い。「鏡」「顔」「言」「恵み」「真理」「弁護者」「愛」などである。アウグスティヌスは理性にとって知っているかどうかは決定的であるが、同じ理性によって知っていることから知らないものを推測できると言う³⁰。もし、そうであるならば不可視の存在は、絶対不可視の存在と可視の存在を結ぶ接点となる。中でも、

アウグスティヌスは「鏡」に一番興味を示した。「鏡」とは何か、「おぼろに映ったもの」は何かを問い、それを精神の記憶と知解力と意志に求めたのである。この三つの機能は一体的に働く理性の三位一体論と呼ぶべきものであって、三位一体の信仰と共にアウグスティヌスの三位一体論を構成する。この不可視の存在に神と人の仲介者であるイエス・キリストを置くことが二つの三位一体論の核心である³¹。アウグスティヌスはそれをイエス・キリストによって現わされた神の愛とし、愛こそ、私たちの信仰と理性が、見えるものと見えない神をつなぐものと考えたのである。

「不可視の存在」の中には、この直前でまとめた信仰的に永遠に属するものも含まれている。このことは、見えないものの中に、信仰の対象と理性の対象が混在していることを示している。信仰と理性、両者共通の対象は、この共通項によって、神と人を信仰と理性によってつなぐことを可能にするのである。例えば、すでに指摘したように、アウグスティヌスが聖書の言葉を意図的に変更した部分も同様な例である（結果3.2）。そこでは「神」を、「生命」、「創造者」、「善」に置き換えて神を私たちの理性の対象とするのである。

信仰と理性をつなぐ不可視の存在、それは人間の善と悪のはざまにある危険性を有しながらも、キリスト教社会福祉の考察においても重要な要素と考えている。

4.3 三位一体論とキリスト教社会福祉

以上の考察をもとに、アウグスティヌスの論じた三位一体論とキリスト教社会福祉との関係について検討する。

(1) 信仰の旅路

アウグスティヌスは自らの人生を「巡礼の旅」と語った³²。この旅は、神の愛を信じ、神をおぼろに見つつキリストをめざし、終わりの日にキリストと出会う希望の旅のように見える。特にアウグスティヌスが三位一体論の中で最も多く引用している「鏡におぼろに映ったもの」という聖句がこの旅では重要である。この言葉は「おぼろにしか見えない」という否定的な意味より、むしろ「おぼろでも見える」という肯定的な意味である。その理由は、「そのとき御子をありのままに見る」という永遠の命に対する熱い信仰を語るからである。巡礼の旅は、三位一体の神を主と信じ、終わりの日に主に会う希望を抱き、神の愛によって神と隣人を愛する³³信仰者の歩みである。信仰・希望・愛³⁴を求める人生の旅とも言えるであろう。このような信仰者としての生き方は、キリスト教を基盤とした個人であれ組織であれ、福祉サービス提供主体に求められるものである。

(2) おぼろに映る鏡

アウグスティヌスの心理学的三位一体論は、「言が肉となった」（ヨハ1:14）が大きな聖書の根拠である。これは、見えない神の言がイエス・キリストとなったことを意味する。このことと、見えない記憶、知解力、意志の働きが言葉や行動となって見えることが似ていると言う。鏡におぼろに映ったように精神は三位一体の神を見ることができると言う。ただし、この人間の能力は善だけでなく悪徳でも機能するので、神と人間の違いは歴然である。類比

というより隠喩³⁵である。筆者は、この点が、矛盾に満ちた複雑な人間を理解する人間のモデルとして優れた人間学であると考えている。アウグスティヌスはパウロと同様な回心を経験し³⁶、様々な人生の体験からこのモデルを説明する。神は人間の状況に応じて語り³⁷、人は成長して御子に似たものに変えられるという聖書の言葉もこのモデルがよく説明する。もし三位一体的な人間学があれば「おぼろに映る鏡」は最も重要なテーマであろう。このような人間理解は、人間の成長だけでなく、発達障害など、生きにくさを抱えた多くの精神に障害を持つ人々に対するケアと深く関係すると考えている。

(3) 愛に根差した社会福祉

アウグスティヌスは第15巻の末尾で、神の三位一体について相応しいことは何も語らなかったと言う³⁸。その言葉のとおり、アウグスティヌスの三位一体論は神そのものを語っているのではなく、三位一体の神を認識する方法を語っているように見える。この方法は信じて理解することを要求する。アウグスティヌスと同様に「鏡とは何か」、「鏡に映るものは何か」、「記憶と知解力と意志の三位一体とはなにか」という、果てしない信仰と理性のはざまにある問いに正面から立ち向かうことを要求する。アウグスティヌスの三位一体論は「愛するもの、愛されるもの、愛」という三位一体を愛の原理として³⁹、父、子、聖霊なる三位一体の信仰と、記憶、知解、意志からなる三位一体の理性的な精神科学の両輪から成る。信仰と科学の調和した愛のキリスト教社会福祉の原理を構築する基本的な思想であると考えている。

5. 結論

本論では、三位一体論で引用されている聖書の言葉を調査し、最も多く用いられている聖句から三位一体論を考察した。これらに関する結論は以下のとおりである。

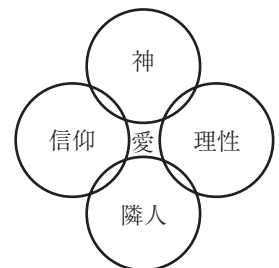
- ①三位一体論の聖書的根拠は七つの聖句に代表される。
- ②七つの聖句を引用する部分に三位一体論の基本的内容が網羅されている。
- ③七つの聖句によってキリスト教教理と三位一体論を概観することができる。

本論では具体的なテーマを論ずる余裕がなかったが、三位一体論と社会福祉の接点については以下のとおりである。

- ①三位一体の信仰が、キリスト教社会福祉にとって重要である。
- ②精神の三機能による三位一体の神理解は人間理解として有益である。
- ③三位一体論は信仰と理性の調和した愛の社会福祉の可能性を拓く。

本稿で論じた内容をイメージで右に示す。神と隣人の間が自身である。アウグスティヌスの三位一体論は希望である。愛が神と人、信仰と理性を結ぶ希望である。

今回、三位一体論が引用する聖句の学びをとおして、終わりの日をめざして生きる古代の敬虔な信仰者の姿を見た思いがする。筆者は、信仰と理性にもとづく三位一体論が愛に根差した社会福祉を明



らかにするものと信じている。本稿に記した多くのことが筆者の思い込みと感ずる読者にはご寛容を切に願う。

凡例

- ・三位一体論テキストの引用箇所は（巻：節）で示した。例えば（10:1）は三位一体論第10巻第1節を意味する。連続する節を引用する時はハイフンで開始と終了を区切る。研究ノートでは（巻：章：節）として章が加わっている点に注意を要する。
- ・引用は「」で示す。「」の中の引用は『』、さらに『』の中の引用は“ ”で示す。
- ・聖書は日本聖書協会「新共同訳聖書」を使用した。本文での引用は省略名続いて章と節をコロンで区切り表示する。例えばロマ1:1は、ローマの信徒への手紙第1章1節である。複数の連続する節はハイフンで開始と終了を区切る。省略名は以下のとおり。

書名	略称	書名	略称
1 マタイによる福音書	マタ	15 テモテへの手紙一	1 テモ
2 マルコによる福音書	マル	16 テモテへの手紙二	2 テモ
3 ルカによる福音書	ルカ	17 テトスへの手紙	テトス
4 ヨハネによる福音書	ヨハ	18 フィレモンへの手紙	ピレモ
5 使徒言行録	使	19 ヘブライ人への手紙	ヘブル
6 ローマの信徒への手紙	ロマ	20 ヤコブの手紙	ヤコブ
7 コリントの信徒への手紙一	I コリ	21 ベトロの手紙一	I ペテ
8 コリントの信徒への手紙二	II コリ	22 ベトロの手紙二	II ペテ
9 ガラテヤの信徒への手紙	ガラ	23 ヨハネの手紙一	I ヨハ
10 エフェソの信徒への手紙	エペ	24 ヨハネの手紙二	II ヨハ
11 フィリピの信徒への手紙	ピリ	25 ヨハネの手紙三	III ヨハ
12 コロサイの信徒への手紙	コロ	26 ユダの手紙	ユダ
13 テサロニケの信徒への手紙一	1 テサ	27 ヨハネの黙示録	黙
14 テサロニケの信徒への手紙二	2 テサ		

- ・引用文献はすべて参考文献として一覧表に示し、通し番号を [] で示した。例えば [1] p.10-12は、参考文献 [1] の10頁～12頁を示す。

引用文献・注

- [1]
- [5], [6], [7]: 本稿では、既に公表した三つの研究ノートをノート1 (2, 3) と略記する。
- カッパドキア三教父: バシレイオス (330頃-379年)、ナジアンゾスのグレゴリオス (329-389)、ニュッサのグレゴリオス (330頃-395頃)
- [10] p.452
- [3] p.108、[10] p.452-453
- [9]

- 7 ノート1 p.34、ノート2 p.2、ノート3 p.98
- 8 [1] p.525、著者自身が難解であると語ったことが訳者解題に紹介されている。
- 9 [3] p.277-279、[4] p.96-119 第6章神学と哲学との相互作用、ノート1 p.35
- 10 [4]：第二バチカン公会議の関連書籍がカトリック中央協議会から多数出版されている。
- 11 Microsoft Access 2016
- 12 [11]
- 13 聖書本文がカギカッコで示されている場合には「引用」、そうでない無い場合を「注」として区別して入力した。本論では、特に明示されていない場合は「引用」と「注」を区別しないで処理している。引用は節の一部の場合であることも多く、入力データはその点を反映していないので細かい議論をするときは注意が必要である。聖書名、章、節は、日本語訳に若干の違いはあるが、テキストと新共同訳聖書ですべて一致していることを確認した。
- 14 入力データの正確性を確認するために、文単位のデータについて開始章・節で並び変えて既存の聖書索引と比較した。その結果、既存の索引は一つの節に同じ聖書箇所が複数回引用されているも、それを一回と数えている点に違いが見られた。今回は頻度も重要と考えられるのでテキスト通り複数回として入力している。この点を除いて、今回入力したデータとテキストの聖書索引が一致していることを確認した。
- 15 ノート1 p.36、3.2 三位一体論第15巻の独立性
- 16 ノート3 p.107
- 17 内訳は2節51、3節18、4節6、5節1、8節1、9節1、14節1である。
- 18 ギリシア語の「ことば」にはlogos（ロゴス）と rēma（レーマ）の二つがあり、聖書の日本語訳では前者を「言」、後者を「言葉」に使い分ける場合がある。新共同訳のヨハネによる福音書冒頭では、キリストがロゴスであるという意味で「言」を用いている。
- 19 4.2
- 20 使徒17:22-31ではパウロの言葉が引用されている。この部分はその一部なので、引用中の引用が『』で示されている。
- 21 今回の選択は、全巻に渡って多く引用され、第15巻でも多く引用されているという二つを条件にしている。第1巻～14巻で引用が多くとも第15巻で引用が1件のため条件に合わなかった6つの聖句については次の点が指摘できる（表9）。一つ目は、これらの聖句が第14巻以前では特定の議論に集中して引用された点である。例えば、引用数の最も多いガラ4:4は第2巻と第4巻で3回ずつ引用されている。次に多い1テモ6:16も同様に、全体で9件の内、第1巻と第2巻で4回ずつ引用されている。二つ目は、除外された聖句が七つの聖句のいずれかと内容が重なっている点である。例えば除外されたガラ4:4の引用箇所15:51にはヨハ15:26が引用されている。1テモ6:16はロマ1:20と同じ箇所でも引用されている。これらの聖句同士は内容的に一部重なっている面がある。以上の検討によって、第15巻と聖句の関係を検討する上で、この除外された6件の影響は少ないと考えられる。
- 22 キリスト教で信じられている世の終りである。本稿では、そのとき、かのとき、御子が現れるとき、などの表現がある。
- 23 複数節の扱いは分かりにくいので、以下に具体的な例を使って解説する。最初の引用聖句は、被造物を通して知る神（①ロマ1:20）である。この聖句は第3節、第10節、第39節で引用されている（表11、表12）。この三つの節の要旨がこの聖句に関する議論の内容である。ところが、第10節には、神の愛（②Iヨハ4:16）も引用されているので、第10節はこの二つの聖句ごとに内容をまとめる必要がある。この場合、それぞれでまとめることも可能であるが、一方に二つをまとめ

た方が適切なことがある。例えば、①ロマ1:20は、第10節では探求方法の原理として引用されており、②Iヨハ4:16は愛にもとづく探求方法を示すために引用されている。そうすると、①ロマ1:20と②Iヨハ4:16を第10節と一緒にまとめるのが適当と判断される。その結果、②Iヨハ4:16では第10節のまとめを省略できる。

- 24 神の三つの実体と対比する場合には「知解力」は「知解」と表現される (15:42)。ノート2 注10 参照。
- 25 テキストでは「あなたはわが忍耐であります。」となっている。新共同訳では「忍耐」が「希望」となっているため、この部分は「忍耐」を「希望」に置き換えて表現した。
- 26 この部分は、アウグスティヌス『ヨハネ福音書講解』引用部分の抜粋
- 27 [8] p.87: 小山氏が「聖書の言葉は、過去、現在、未来と三つにばらばらになったコマギレの言葉ではありません。」と語るのとは真実で、本稿では理解の道標と考えている。
- 28 ノート2 p.7: アウグスティヌス独自の三位一体論が始まる第8巻第6節の言葉。
- 29 G・タイセン, 大貫隆訳. 新約聖書: 歴史・文学・宗教. 教文館, 2003
- 30 ノート2 p.8
- 31 イエスは言われた。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない。」(ヨハ14:6)
- 32 [1] 2:28, 14:4
- 33 [1] 8:12、ノート2 p.27-28、付録2「三位一体論」第8巻要旨
- 34 Iコリ13:13
- 35 ノート1 p.41 注17、ノート3 p.106、4.2 神理解の限界
- 36 ノート1 p.38
- 37 ノート3 p.104、4.2 神理解の限界
- 38 「しかし、私が語ってきた多くのことにも拘わらず、あの至高の三位一体の言説に絶したものに適しいことを少しも語らなかつた、と敢て表明する。」(15:50)
- 39 ノート2 p.6、4.1 (2) 愛の原理と精神の三一性モデル

参考文献

- [1] アウグスティヌス, 中沢宣夫訳. 三位一体論. 東京, 東京大学出版会, 1989, 540p.
- [2] 教皇庁教理省 国際神学委員会. 今日のカトリック神学: 展望・原理・基準. 東京, カトリック中央協議会, 2013, 111p.
- [3] 教皇ベネディクト十六世. 教父. 初版, 東京, カトリック中央協議会, 2009, 398p. (ペテロ文庫)
- [4] 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅, 久保守訳. 信仰と理性. 東京, カトリック中央協議会, 2002, 180p.
- [5] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察: 研究ノート1”. 浦和論叢. Vol.54, 2016-2, p.33-61 (2016)
- [6] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察: 研究ノート2”. 浦和論叢. Vol.55, 2016-8, p.1-29 (2016)
- [7] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論と社会福祉の接点に関する考察: 研究ノート3”. 浦和論叢. Vol.56, 2017-2, p.97-125 (2017)
- [8] 小山晃佑, その町が平安であれば, 東京, 同信社, 2002, 119p.
- [9] 土井健司. “カイサリアのバシレイオスと「バシレイアス」: 古代キリスト教における病院施設の一考察”. 宗教研究. 86 (1). p.1-26 (2012)

- [10] マクグラス, A・E・, 神代真砂美訳. キリスト教神学入門. 東京, 教文館, 2002, 804p.
[11] Edmund Hill, O.P. ; John E. Rotelle, O.S.A.ed.. The Trinity. 2nd ed., New York; New City Press, 2015, 471p. (THE WORKS OF SAINT AUGUSTINE; A Translation for the 21st Century)

参考資料

1. 三位一体論の成立

354年	アウグスティヌス生誕
399年頃	執筆開始 (45歳)
405年	第4巻まで執筆完了
415年頃	第5巻から第12巻前半執筆完了、未完成原稿の奪取事件
421年前後	第12巻後半から第15巻まで完成、公刊 (64歳)
430年	アウグスティヌス永眠 (76歳)

注：参考文献 [1]、<http://faculty.georgetown.edu/jod/augustine/>

2. 三位一体論第1～14巻のテーマ

- 第1巻：三位一体の統一性と等しさ
第2～4巻：三位一体の統一性と等しさ、御子と聖霊の派遣の問題
第5巻：アリウス派の論駁
第6巻：キリストの力と知恵
第7巻：父なる神の知恵と力
第8巻：父と子の大きさの問題、愛による三位一体の可能性
第9巻：精神の視点から見る神の似姿
第10巻：精神における記憶と知解力と意志の三一性
第11巻：五官の一つである視覚を例とした精神の三一性
第12巻：知識と知恵
第13巻：キリスト教信仰と精神の三一性
第14巻：人間の真の知恵と精神の三一性
注：第15巻5節を参考に作成。第5巻と第12巻はテキスト訳者解題を参考。

図表

表1：入力データの例（文単位）

ID	巻	節	引用	新約	章1	節1	章2	節2
100	1	2	1	15	6	16		
200	1	2	1	20	1	17		
300	1	3	1	12	2	3		
400	1	3	1	7	2	2		
500	1	3	1	7	2	3		
600	1	3	1	7	3	1	3	2
700	1	5	0	11	3	15		
800	1	7	0	1	3	16		
900	1	7	0	5	2	2	2	4
1000	1	7	1	2	1	11		
1100	1	7	0	1	17	5		
1200	1	7	1	4	12	28		
1300	1	8	1	11	3	12		
1400	1	8	0	11	3	13	3	14
1500	1	9	1	4	1	1		
1600	1	9	1	4	1	14		
1700	1	9	1	4	1	3	1	4
1800	1	9	1	23	5	20		
1900	1	10	1	15	6	16		
2000	1	10	1	23	5	20		

注：入力データ例（最初の20件）。「文単位」は複数節の引用または注を1、「節単位」は複数節を節に分けて数える方法。「引用」1は引用、0は注。「新約」は新約聖書文書の通し番号（凡例）。章1・節1は開始、章2・節2は終了箇所。

表2：節単位のデータ例

ID	巻	節	引用	新約	章1	節1	複
100	1	2	1	15	6	16	
200	1	2	1	20	1	17	
300	1	3	1	12	2	3	
400	1	3	1	7	2	2	
500	1	3	1	7	2	3	
600	1	3	1	7	3	1	1
601	1	3	1	7	3	2	1
700	1	5	0	11	3	15	
800	1	7	0	1	3	16	
900	1	7	0	5	2	2	1
901	1	7	0	5	2	3	1
902	1	7	0	5	2	4	1
1000	1	7	1	2	1	11	
1100	1	7	0	1	17	5	
1200	1	7	1	4	12	28	
1300	1	8	1	11	3	12	
1400	1	8	0	11	3	13	1
1401	1	8	0	11	3	14	1
1500	1	9	1	4	1	1	
1600	1	9	1	4	1	14	
1700	1	9	1	4	1	3	1
1701	1	9	1	4	1	4	1
1800	1	9	1	23	5	20	
1900	1	10	1	15	6	16	
2000	1	10	1	23	5	20	

注：「複」1は分割されたことを示す。

表3：各巻の聖書引用数（文単位）

巻	引用	注	合計
1	141	35	176
2	70	20	90
3	15	19	34
4	50	50	100
5	14	7	21
6	15	4	19
7	24	1	25
8	21	6	27
9	12	0	12
10	1	0	1
11	3	1	4
12	13	12	25
13	42	21	63
14	35	13	48
15	95	42	137
計	551	231	782

表4：各巻の聖書引用数（節単位）

巻	引用	注	合計
1	173	44	217
2	77	37	114
3	21	22	43
4	59	117	176
5	18	7	25
6	16	7	23
7	25	1	26
8	30	10	40
9	15	0	15
10	1	0	1
11	3	1	4
12	18	13	31
13	74	34	108
14	38	13	51
15	120	52	172
計	688	358	1046

表5：聖書の引用数（文単位）

聖書	引用	注	合計
マタ	51	27	78
マル	2	5	7
ルカ	17	11	28
ヨハ	177	37	214
使	18	18	36
ロマ	47	32	79
I コリ	90	39	129
II コリ	14	9	23
ガラ	18	8	26
エペ	17	5	22
ピリ	18	10	28
コロ	20	7	27
1 テサ	2	0	2
1 テモ	17	8	25
2 テモ	1	1	2
テトス	0	1	1
ヘブル	8	2	10
ヤコブ	2	1	3
I ペテ	0	1	1
I ヨハ	32	5	37
黙	0	4	4
計	551	231	782

表6：聖書の引用数（節単位）

聖書	引用	注	合計
マタ	56	79	135
マル	2	10	12
ルカ	26	42	68
ヨハ	220	46	266
使	28	33	61
ロマ	61	36	97
I コリ	100	46	146
II コリ	24	10	34
ガラ	22	8	30
エペ	24	5	29
ピリ	25	12	37
コロ	27	7	34
1 テサ	4	0	4
1 テモ	21	8	29
2 テモ	1	1	2
テトス	0	1	1
ヘブル	11	2	13
ヤコブ	2	1	3
I ペテ	0	1	1
I ヨハ	34	5	39
黙	0	5	5
計	688	358	1046

表7：各巻の聖書文書別引用数（節単位）

聖書	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	合計	引	注
マタ	20	19	2	47	1	4	2	7	4	1	1	1	2	2	22	135	56	79
マル	2	・	・	9	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	・	12	2	10
ルカ	7	4	・	24	2	・	・	・	・	・	・	・	14	1	16	68	26	42
ヨハ	81	41	8	36	7	5	8	・	1	・	・	1	31	5	42	266	220	46
使	4	10	9	9	2	・	・	2	・	・	・	・	4	3	18	61	28	33
ロマ	13	7	3	18	2	2	2	3	・	・	1	6	29	5	6	97	61	36
I コリ	37	6	6	8	8	9	7	4	4	・	・	10	6	13	28	146	100	46
II コリ	3	4	1	5	1	・	・	10	・	・	1	・	1	5	3	34	24	10
ガラ	4	6	2	3	・	・	・	2	1	・	・	3	5	・	4	30	22	8
エペ	・	・	・	6	1	1	1	・	・	・	・	2	6	5	7	29	24	5
ピリ	23	5	3	1	1	・	1	・	3	・	・	・	・	・	・	37	25	12
コロ	5	1	2	5	・	・	2	・	・	・	1	2	6	7	3	34	27	7
1 テサ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	4	4	4	・
1 テモ	8	8	1	3	・	1	1	1	・	・	・	3	・	・	3	29	21	8
2 テモ	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	2	1	1
テトス	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	・	・	1	・	1
ヘブル	・	1	6	1	・	・	・	・	・	・	・	1	1	2	1	13	11	2
ヤコブ	1	・	・	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	1	3	2	1
I ペテ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	・	1	・	1
I ヨハ	6	1	・	1	・	1	2	10	1	・	・	1	・	3	13	39	34	5
黙	2	1	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	1	・	・	5	・	5
計	217	114	43	176	25	23	26	40	15	1	4	31	108	51	172	1046	688	358

注：「・」はゼロ。

表8：第15巻引用聖句について第1～14巻の引用状況

a：第1～14巻に引用あり

b：第1～14巻に引用なし（第15巻のみ）

聖書	章	節	15	1-14	合計	聖書	章	節	15	1-14	合計	聖書	章	節	15	1-14	合計
マタ	3	16	1	6	7	マタ	5	37	2	・	2	ヨハ	13	23	1	・	1
マタ	22	40	2	3	5	マタ	6	8	1	・	1	ヨハ	13	24	1	・	1
ルカ	1	15	1	1	2	マタ	9	2	1	・	1	ヨハ	15	25	1	・	1
ヨハ	1	1	1	5	6	マタ	9	3	2	・	2	使	2	33	1	・	1
ヨハ	1	3	3	10	13	マタ	9	4	2	・	2	使	2	38	1	・	1
ヨハ	1	5	1	3	4	マタ	10	20	1	・	1	使	4	12	1	・	1
ヨハ	1	14	4	14	18	マタ	11	13	1	・	1	使	6	7	1	・	1
ヨハ	1	29	1	1	2	マタ	15	11	1	・	1	使	8	18	1	・	1
ヨハ	4	13	1	1	2	マタ	15	16	1	・	1	使	8	19	1	・	1
ヨハ	4	24	2	2	4	マタ	15	17	1	・	1	使	9	4	1	・	1
ヨハ	5	19	2	4	6	マタ	15	18	1	・	1	使	10	38	1	・	1
ヨハ	5	26	1	6	7	マタ	15	19	1	・	1	使	10	44	1	・	1
ヨハ	7	16	1	5	6	マタ	25	33	1	・	1	使	10	45	1	・	1
ヨハ	7	39	1	2	3	マタ	25	40	1	・	1	使	10	46	1	・	1
ヨハ	14	26	2	2	4	マタ	28	19	2	・	2	使	11	15	1	・	1
ヨハ	15	26	3	7	10	ルカ	2	52	1	・	1	使	11	16	1	・	1
ヨハ	20	22	2	2	4	ルカ	3	21	1	・	1	使	11	17	1	・	1
使	2	4	1	7	8	ルカ	3	22	1	・	1	ロマ	10	17	1	・	1
使	2	37	1	1	2	ルカ	3	23	1	・	1	Iコリ	12	1	1	・	1
使	8	20	2	1	3	ルカ	4	1	1	・	1	Iコリ	12	13	1	・	1
ロマ	1	20	3	5	8	ルカ	5	21	1	・	1	Iコリ	12	29	1	・	1
ロマ	5	5	2	3	5	ルカ	5	22	1	・	1	Iコリ	13	1	1	・	1
Iコリ	1	24	2	4	6	ルカ	6	19	1	・	1	Iコリ	13	3	1	・	1
Iコリ	11	7	1	3	4	ルカ	10	30	1	・	1	Iコリ	14	21	1	・	1
Iコリ	12	11	1	1	2	ルカ	10	31	1	・	1	IIコリ	1	19	1	・	1
Iコリ	13	2	2	1	3	ルカ	10	32	1	・	1	ガラ	4	6	1	・	1
Iコリ	13	12	15	18	33	ルカ	10	33	1	・	1	ガラ	4	24	1	・	1
Iコリ	15	28	1	3	4	ルカ	10	34	1	・	1	エベ	4	7	1	・	1
IIコリ	3	18	2	1	3	ルカ	12	17	1	・	1	エベ	4	9	1	・	1
ガラ	4	4	1	10	11	ルカ	24	44	1	・	1	エベ	4	10	1	・	1
ガラ	5	6	1	3	4	ヨハ	3	8	1	・	1	エベ	4	11	1	・	1
エベ	4	8	2	2	4	ヨハ	3	17	1	・	1	エベ	4	12	1	・	1
コロ	1	13	1	1	2	ヨハ	4	7	1	・	1	1テサ	2	13	1	・	1
コロ	2	11	1	1	2	ヨハ	4	8	1	・	1	1テサ	5	6	1	・	1
コロ	3	10	1	7	8	ヨハ	4	9	1	・	1	1テサ	5	7	1	・	1
1テモ	1	5	1	1	2	ヨハ	4	10	1	・	1	1テサ	5	8	1	・	1
1テモ	2	5	1	4	5	ヨハ	4	11	1	・	1	2テモ	4	2	1	・	1
1テモ	6	16	1	8	9	ヨハ	4	12	1	・	1	ヤコブ	2	19	1	・	1
へブ	2	4	1	1	2	ヨハ	4	14	1	・	1	Iヨハ	4	13	1	・	1
Iヨ	3	2	5	8	13	ヨハ	7	37	1	・	1	Iヨハ	4	19	1	・	1
Iヨ	4	7	1	1	2	ヨハ	7	38	2	・	2						
Iヨ	4	8	2	4	6	ヨハ	13	21	1	・	1						
Iヨ	4	16	3	4	7	ヨハ	13	22	1	・	1						
計			84	177	261							計			88	・	88

注：「・」はゼロ。

表9：第15巻と第1～14巻の両方で引用されている聖句、引用件数、引用箇所（巻：節）

聖書	章	節	15	1-14	計	巻：節	
*1	I コリ	13	12	15	18	33	1:16 1:16 1:21 1:28 1:31 2:28 3:9 3:10 5:1 7:7 8:6 9:1 12:22 12:22 13:26 14:4 14:11 14:25 15:14 15:20 15:20 15:21 15:21 15:21 15:22 15:22 15:24 15:26 15:27 15:39 15:40 15:41 15:44
*2	ヨハ	1	14	4	14	18	1:9 2:9 2:11 3:3 4:4 4:28 7:4 7:4 13:2 13:12 13:22 13:24 13:24 14:24 15:20 15:20 15:46 15:46
*3	ヨハ	1	3	3	10	13	1:9 1:12 1:14 1:22 2:14 2:25 2:27 4:3 7:1 13:2 15:20 15:20 15:38
*4	I ヨハ	3	2	5	8	13	1:17 1:31 2:28 4:5 12:22 14:24 14:25 14:25 15:14 15:21 15:22 15:26 15:26
	ガラ	4	4	1	10	11	1:14 1:22 2:8 2:9 2:12 3:3 4:11 4:26 4:27 13:25 15:51
*5	ヨハ	15	26	3	7	10	2:5 4:28 4:29 5:12 5:15 12:5 13:14 15:45 15:48 15:51
	I テモ	6	16	1	8	9	1:2 1:10 1:10 1:10 2:14 2:15 2:32 2:34 15:7
	使	2	4	1	7	8	1:7 2:10 2:11 2:26 3:27 4:29 4:29 15:46
	コロ	3	10	1	7	8	7:12 11:1 12:12 14:22 14:22 14:23 14:25 15:5
*6	ロマ	1	20	3	5	8	2:25 4:21 4:23 6:12 13:24 15:3 15:10 15:39
	マタ	3	16	1	6	7	1:7 2:10 2:11 3:3 3:27 4:30 15:46
	ヨハ	5	26	1	6	7	1:22 1:26 1:29 1:30 2:3 7:4 15:47
*7	I ヨハ	4	16	3	4	7	6:7 8:10 8:12 9:1 15:5 15:10 15:27
	ヨハ	1	1	1	5	6	1:9 2:9 2:27 6:3 13:2 15:19
	ヨハ	7	16	1	5	6	1:23 1:27 1:27 2:4 2:5 15:48
	ヨハ	5	19	2	4	6	1:11 2:3 2:3 2:5 15:23 15:24
	I コリ	1	24	2	4	6	1:10 6:1 7:1 14:1 15:9 15:31
	I ヨハ	4	8	2	4	6	7:6 8:11 8:12 8:12 15:31 15:37
	I テモ	2	5	1	4	5	1:14 3:26 4:12 6:10 15:44
	マタ	22	40	2	3	5	2:28 6:7 8:10 15:30 15:46
	ロマ	5	5	2	3	5	7:5 8:10 13:14 15:31 15:32
	ヨハ	1	5	1	3	4	4:4 4:28 13:2 15:49
	I コリ	11	7	1	3	4	7:12 12:9 12:21 15:14
	I コリ	15	28	1	3	4	1:15 1:20 1:28 15:51
	ガラ	5	6	1	3	4	13:5 13:14 13:26 15:32
	ヨハ	4	24	2	2	4	5:12 14:22 15:7 15:27
	ヨハ	14	26	2	2	4	1:25 2:7 15:45 15:51
	ヨハ	20	22	2	2	4	4:29 13:14 15:45 15:46
	エペ	4	8	2	2	4	4:17 13:14 15:34 15:34
	ヨハ	7	39	1	2	3	4:29 4:29 15:33
	使	8	20	2	1	3	5:12 15:32 15:35
	I コリ	13	2	2	1	3	14:23 15:32 15:32
	II コリ	3	18	2	1	3	14:23 15:14 15:20
	ルカ	1	15	1	1	2	4:29 15:46
	ヨハ	1	29	1	1	2	2:11 15:44
	ヨハ	4	13	1	1	2	9:14 15:33
	使	2	37	1	1	2	2:31 15:35
	I コリ	12	11	1	1	2	5:14 15:34
	コロ	1	13	1	1	2	13:19 15:37
	コロ	2	11	1	1	2	14:22 15:36
	I テモ	1	5	1	1	2	8:6 15:44
	へブル	2	4	1	1	2	3:22 15:34
	I ヨハ	4	7	1	1	2	8:12 15:31
			計	84	177	261	
	七つの聖句		計	36	66	102	

注：*1～*7は第15巻の引用件数が3以上の七つの聖句。

表10：第15巻のみ引用している聖句、引用件数、引用箇所（巻：節）

聖書	章	節	15	巻：節	聖書	章	節	15	巻：節	聖書	章	節	15	巻：節
マタ	5	37	2	15:20 15:23	ルカ	10	34	1	15:50	使	10	46	1	15:35
マタ	9	3	2	15:17 15:18	ルカ	12	17	1	15:17	使	11	15	1	15:35
マタ	9	4	2	15:17 15:18	ルカ	24	44	1	15:30	使	11	16	1	15:35
マタ	28	19	2	15:46 15:51	ヨハ	3	8	1	15:36	使	11	17	1	15:35
ヨハ	7	38	2	15:33 15:33	ヨハ	3	17	1	15:51	ロマ	10	17	1	15:20
マタ	6	8	1	15:22	ヨハ	4	7	1	15:33	Iコリ	12	1	1	15:36
マタ	9	2	1	15:17	ヨハ	4	8	1	15:33	Iコリ	12	13	1	15:33
マタ	10	20	1	15:45	ヨハ	4	9	1	15:33	Iコリ	12	29	1	15:34
マタ	11	13	1	15:30	ヨハ	4	10	1	15:33	Iコリ	13	1	1	15:32
マタ	15	11	1	15:18	ヨハ	4	11	1	15:33	Iコリ	13	3	1	15:32
マタ	15	16	1	15:18	ヨハ	4	12	1	15:33	Iコリ	14	21	1	15:30
マタ	15	17	1	15:18	ヨハ	4	14	1	15:33	IIコリ	1	19	1	15:24
マタ	15	18	1	15:18	ヨハ	7	37	1	15:33	ガラ	4	6	1	15:45
マタ	15	19	1	15:18	ヨハ	13	21	1	15:19	ガラ	4	24	1	15:15
マタ	25	33	1	15:32	ヨハ	13	22	1	15:19	エペ	4	7	1	15:34
マタ	25	40	1	15:34	ヨハ	13	23	1	15:19	エペ	4	9	1	15:34
ルカ	2	52	1	15:46	ヨハ	13	24	1	15:19	エペ	4	10	1	15:34
ルカ	3	21	1	15:46	ヨハ	15	25	1	15:30	エペ	4	11	1	15:34
ルカ	3	22	1	15:46	使	2	33	1	15:46	エペ	4	12	1	15:34
ルカ	3	23	1	15:46	使	2	38	1	15:35	1テサ	2	13	1	15:20
ルカ	4	1	1	15:46	使	4	12	1	15:44	1テサ	5	6	1	15:15
ルカ	5	21	1	15:17	使	6	7	1	15:20	1テサ	5	7	1	15:15
ルカ	5	22	1	15:17	使	8	18	1	15:46	1テサ	5	8	1	15:15
ルカ	6	19	1	15:45	使	8	19	1	15:46	2テモ	4	2	1	15:51
ルカ	10	30	1	15:50	使	9	4	1	15:34	ヤコブ	2	19	1	15:32
ルカ	10	31	1	15:50	使	10	38	1	15:46	Iヨハ	4	13	1	15:31
ルカ	10	32	1	15:50	使	10	44	1	15:35	Iヨハ	4	19	1	15:31
ルカ	10	33	1	15:50	使	10	45	1	15:35					計 88

表11 第15巻七つの聖句の目次

七つの聖句を第15巻目次（拙著ノート付録）に示したものの。聖句右欄は順に引用箇所（巻：節）、第15巻および全巻の引用件数である。

第1部 第1巻から14巻で証明した真理（第1～3章）	15 全
3 論究を積み重ねて人間の精神に神を求めることに到達した。(2: 2-3) ロマ 1:20 世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。	2:25 4:21 4:23 6:12 13:24 15:3 15:10 15:39 3 8
5 第1巻から14巻で証明されたこと。(3: 4-5) Iヨハ 4:16 わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。	6:7 8:10 8:12 9:1 15:5 15:10 15:27 3 7

第2部 三位一体を探求する方法 (第4～9章)			
10 神に対する言表の考察を経て人間の精神の内に三一性を見出す。(6: 9-10)			
I ヨハ	4:16 わたしたちは、わたしたちに対する神の・・・	15:5再	3 7
ロマ	1:20 世界が造られたときから、目に見えない・・・	15:3再	3 8
14 パウロの言葉「鏡におぼろに映ったものを見る」を解釈する。(8: 14)			
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったもの を見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて 見ることになる。わたしは、今は一部しか知らな くとも、そのときには、はっきり知られているよう にはっきり知ることになる。	1:16 1:16 1:21 1:28 1:31 2:28 3:9 3:10 5:1 7:7 8:6 9:1 12:22 12:22 13:26 14:4 14:11 14:25 15:14 15:20 15:20 15:21 15:21 15:21 15:22 15:22 15:24 15:26 15:27 15:39 15:40 15:41 15:44	15 33
I ヨハ	3:2 愛する者たち、わたしたちは、今既に神の子です が、自分がどのようになるかは、まだ示されていま せん。しかし、御子が現れるとき、御子に似た者と なるということを知っています。なぜなら、そのと き御子をありのままに見るからです。	1:17 1:31 2:28 4:5 12:22 14:24 14:25 14:25 15:14 15:21 15:22 15:26 15:26	5 13
第3部 三位一体から生まれる言葉 (第10～16章)			
20 私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。(11: 20-21)			
ヨハ	1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。 わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子と しての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。	1:9 2:9 2:11 3:3 4:4 4:28 7:4 7:4 13:2 13:12 13:22 13:24 13:24 14:24 15:20 15:20 15:46 15:46	4 18
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
ヨハ	1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によ らずに成ったものは何一つなかった。	1:9 1:12 1:14 1:22 2:14 2:25 2:27 4:3 7:1 13:2 15:20 15:20 15:38	3 13
ヨハ	1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。 わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子と しての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。	1:9 2:9 2:11 3:3 4:4 4:28 7:4 7:4 13:2 13:12 13:22 13:24 13:24 14:24 15:20 15:20 15:46 15:46	4 18
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
ヨハ	1:3 万物は言によって成った。成ったもので、言によ らずに成ったものは何一つなかった。	1:9 1:12 1:14 1:22 2:14 2:25 2:27 4:3 7:1 13:2 15:20 15:20 15:38	3 13
21 私たちが言葉を発することと御子の受肉が似ている。(11: 20-21) 私たちの真実な言葉は記憶の宝庫から生まれる。(12: 21-22)			
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
I ヨハ	3:2 愛する者たち、わたしたちは、今既に神の・・・	15:14再	5 13
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
22 私たちの真実な言葉は記憶の宝庫から生まれる。(12: 21-22) 神は創造する以前から創造するものを知っている。(13: 22)			
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
I ヨハ	3:2 愛する者たち、わたしたちは、今既に神の・・・	15:14再	5 13
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33

24 父から生まれた御言葉と私たちの内的に語る言葉は似ている。(14: 23-24) 内的な言葉はある種の精神に存在する旋回的な運動から生まれる。(15: 24-25)			
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
26 神は人間のように思惟から言葉を生むのではない。(16: 25-26)			
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
I ヨハ	3:2 愛する者たち、わたしたちは、今既に神の・・・	15:14再	5 13
I ヨハ	3:2 愛する者たち、わたしたちは、今既に神の・・・	15:14再	5 13
第4部 三位一体の愛 (第17～21章)			
27 聖霊が愛なる神である。(17: 27-31)			
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
I ヨハ	4:16 わたしたちは、わたしたちに対する神の・・・	15:5再	3 7
38 精神の記憶、知解力、意志に見出す三位一体の似姿。(20: 38-39)			
ヨハ	1:3 万物は言によって成った。成ったもので、・・・	15:20再	3 13
39 精神の記憶、知解力、意志に見出す三位一体の似姿。(20: 38-39)			
ロマ	1:20 世界が造られたときから、目に見えない・・・	15:3再	3 8
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
40 意志または愛は記憶と知解に由来する。(21: 40-41)			
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
41 意志または愛は記憶と知解に由来する。(21: 40-41)			
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
第5部 三位一体を見る限界 (第22～28章)			
44 精神の三一性を信じること。(24: 44) 鈍くても、キリスト・イエスの救いが得られる。(25: 44-45)			
I コリ	13:12 わたしたちは、今は、鏡におぼろに映・・・	15:14再	15 33
45 父と子とから聖霊が発出する。(26: 45)			
ヨハ	15:26 わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうと している弁護者、すなわち、父のもとから出る真理 の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをな さるはずである。	2:5 4:28 4:29 5:12 5:15 12:5 13:14 15:45 15:48 15:51	3 10
46 イエス・キリストは神性において聖霊を与え人間として聖霊を受けられる。(26: 46)			
ヨハ	1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿ら・・・	15:20再	4 18
ヨハ	1:14 言は肉となって、わたしたちの間に宿ら・・・	15:20再	4 18
48 三位一体において生誕と発出を区別するのは難しい。(27: 48)			
ヨハ	15:26 わたしが父のもとからあなたがたに遣・・・	15:45再	3 10
51 この書に書かれたものが主に由来することを祈る。(28: 51)			
ヨハ	15:26 わたしが父のもとからあなたがたに遣・・・	15:45再	3 10

表12 七つの聖句の第15巻引用節

	短いタイトル	聖句	3	5	10	14	20	21	22	24	26	27	38	39	40	41	44	45	46	48	51	計
1	被造物を通して知る神	ロマ 1:20	1		1									1								3
2	神の愛	I ヨハ 4:16		1	1							1										3
3	鏡におぼろに映ったもの	I コリ 13:12				1	2	3	2	1	1	1		1	1	1	1					15
4	御子に似た者	I ヨハ 3:2				1		1	1		2											5
5	肉となった言	ヨハ 1:14					2												2			4
6	言によって成った万物	ヨハ 1:3					2						1									3
7	父と子から遣わされる弁護者	ヨハ 15:26																1		1	1	3
計			1	1	2	2	6	4	3	1	3	2	1	2	1	1	1	1	2	1	1	36

表13 聖句ごとの三位一体論要旨における重複引用の扱い

	短いタイトル	聖句	3	5	10	14	20	21	22	24	26	27	38	39	40	41	44	45	46	48	51	計
1	被造物を通して知る神	ロマ 1:20	1		1									1								3
	神の愛	I ヨハ 4:16			1																	1
	鏡におぼろに映ったもの	I コリ 13:12												1								1
2	神の愛	I ヨハ 4:16		1	0							1										2
3	鏡におぼろに映ったもの	I コリ 13:12				1	0	3	2	1	0	1		0	1	1	1					11
	御子に似た者	I ヨハ 3:2						1	1													2
4	御子に似た者	I ヨハ 3:2				1		0	0		2											3
	鏡におぼろに映ったもの	I コリ 13:12									1											1
	肉となった言	ヨハ 1:14					2												2			4
5	鏡におぼろに映ったもの	I コリ 13:12					2															2
	言によって成った万物	ヨハ 1:3					1															1
	言によって成った万物	ヨハ 1:3					1						1									2
6	言によって成った万物	ヨハ 1:3					1						1									2
7	父と子から遣わされる弁護者	ヨハ 15:26																1		1	1	3
計			1	1	2	2	6	4	3	1	3	2	1	2	1	1	1	1	2	1	1	36

注：網掛け部分が一つの節に重複した聖句がある場合のまとめ先を示す。

謝辞

この研究は多くの精神的な障害を持つ方々との交流から始まりました。教会や職場、福祉施設での経験はたいへん貴重なものでした。いつも励まされるホノルル在住の神学の友 Conrad Koji Moriwakeさん、聖書の引用箇所の確認を手伝ってくれた私の妻に心から感謝します。

Summary

A Study of Augustine's Concept of the Trinity and Social Welfare :
The Trinity Theory, Drawn by the Seven Biblical Scriptures

Shuichiro Kunori

In this study, Augustine's Trinity theory is used to consider the point of contact between Christianity and social welfare. As part of this research, I examined all the scriptures in the New Testament and discussed the relationship between the Trinity theory and the Bible. I found that the seven well-known scriptures of the New Testament are used often. I extracted only those parts from the seven scriptures that were relevant to Augustine's vast argument, and used these to summarize the Trinity theory. In this summary, not only Augustine's own psychological trinity theory but also his personal faith clearly appears. His Trinity theory is based on the principle of the "loving actor, loved ones, and love," and explores the love of God and the love of one's neighbors by faith and reason. I believe that his idea provides valuable intellectual heritage for seeking Christian social welfare in harmony with faith and reason in a scientific and developed modern society.

Keywords Augustine, the Trinity, social welfare, seven biblical scriptures

(2017年5月18日受領)